（第三種郵便物認可）消費税込み定価１ヶ月3,000円・１部120円　日曜休刊

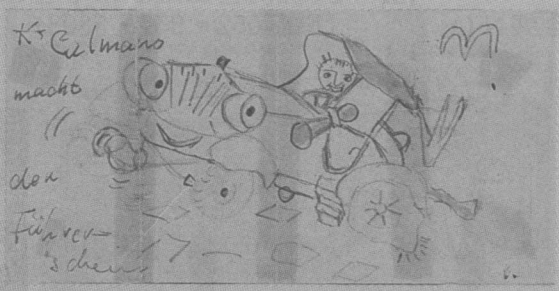
マイウェイ my way

17歳の春

南山大学学長　ミカエル・カルマノ　12

寮生活で積んだ数々の経験

17歳になる年の春は将来の道を決める重要な転換期となった。ヘブライ語の先生が企画してくれた、イスラエルへの修学旅行を最後に、私は神言修道会の経営していたギムナジウムに転校することを決心した。行き先の学校は、フランスとの国境に近いザールラント州のザンクト・ヴェンデルにあり、男子全寮制であった。大学入学の必要条件である。私が卒業した数年後この学校も寮を閉めて、共学の私立ギムナジウムになった。



後輩が描いたスケッチ「運転免許を取ろうとしているカルマノ」（65年に没取した）

あった資格試験（「アビトゥーア」）を取得する人口の割合がまだ10％未満であった当時は、このような学校は司祭職（神父）を目指す青年にとって極めて大きな役割を果たしていた。早ければ小学校5年生（ギムナジウムの初年度）から入寮できたが、このような学校は今ではほとんど閉鎖されてしまっていた。

6年間毎朝バスや電車に乗って通学していた私にとって、今まで経験したことのない新生活が始まった。授業が午前中で終わり、部活のないドイツの学校であったので、クラスメイトというと、同じ教室で同じ課題に取り組み、時々一緒になってちょっとした悪戯をはたらく良い仲間ではあったが、転校後は放課後も一緒に宿題に励み、同じ釜の飯を食う友達となっていた。ここまで数学を敬遠していた私はもっと積極的に勉強に取り組むようになり、少しだけその面白さを感じられるようになった気がする。試験の成績も良くなってきたこともあり、数学が得意な友達が救い主となってくれたことに感謝している。

助かったのは勉強の面だけではなかった。休憩時間のバレーボールや、夕食後のトランプは仲間意識を高める要因になった。ドイツでは古くから「魔女の夜」と呼ばれている4月30日の夜を徹夜して、前日に切り倒した木を学校の裏に飾ったことは、今でも5年に一回の同窓会の集まりで必ず話題に上がる。

高学年になれば、先輩としての役割も任されるようになったが、その一つは自習の時間に後輩を監督することであった。おとなしく宿題に取り組んでいるはずの後輩たちがある日何かを回しながら笑っていることに気づいて、「カルマノは運転免許を取ろうとしている」と書いてある落書きを没収した。厳しい顔を見せるには少し苦労をしたものであった。